

生徒指導研究

中野 満男 高橋 恵亮 米山 誠 倉田 有邦
原 幸宏 米田 閏一 丸山 豊 川田 基生
高橋 守

自主性と規律の指導における基本的な課題

——名大付中・高の生徒像を探る——

米山 誠 原 幸宏

1. ま え が き

すでに56年・57年に、名大付属中学・高校生を対象として学校生活に関する意識調査を行った。56年には、自主性尊重の教育方針や自由な校風がはたしてどれだけ生徒に認識され、日常的に生かされているのかを中心に、次いで57年には、集団生活の実態や規律に対する学校・教師の指導が生徒にどう意識されているのかを中心に、それぞれアンケートを行い考察したのである⁽¹⁾。

その結果、教育方針、校風なるものの実情に対して、「自由、自主性尊重といいながら実際は放任主義にすぎない」、「ぬるま湯に浸っているのは教師の方ではないか」、「なれあい、だらけをひきしめるものを作ってほしい」、「自主性の意味を最初にもどって考え直してほしい。抑えつけるか、放っておくかのどちらかじゃだらしなさすぎる」等、生徒の意見が多数みられた。要するに、集団生活の規律が守られていないと感じる者が、守られていると感じる者よりもはるかに多数であり、きびしさの欠如、いわゆる「ぬるま湯」的な状況への批判、反省が予想を超えて強く示されていた⁽²⁾。

学校としては56年度以降、生徒の実態に即した指導のあり方を検討し合い、例えば、副担任制改善と担任会の充実化、遅刻防止や諸連絡徹底を旨とした毎朝のHR実施、毎日の全校一斉清掃、便所でのスリッパはき替え、靴規定改正、ジュース販売中止等々をその都度、論議を重ねながら決定し実現してきた。

一方、生徒の非行問題は全国的情勢を反映するように年々増加し、学校としては個々の事件への対応、生徒の特別指導措置に追われつづけている観がある。また、精神的心理的に不安定で正常な学校生活を続けら

れない生徒も少なくはない。非行問題の内容、程度は種々様々であるが、当該生徒を指導しながら全体的に、道徳的価値判断の能力の低さ、責任感・義務感の乏しさ等を痛感させられる。厳しい注意を受けても自己の内面深く反省し自覚することができない。同一人物がその都度反省を誓いながら、何度も事件を繰り返すことに、それは端的に表れている。

しかしながら、こうした判断力、自省心の欠如の問題は、一部の生徒に限られるわけではなく、一般的な傾向になりつつあると考えられる。もともと自主性の指導にとって、生徒一人一人の自覚や価値判断の指導は不可欠であるといえよう。激しい受験体制下にあって、中学・高校教育は全国的に管理的指導強化が進んでいるようであるが、それは自主的な判断力や責任感を育てるよりもむしろ失わせているおそれがある。

私たちは自主性を生かす生活指導を進めるために、生徒の実態を深く知り、問題点を探り出さなくてはならない。その意味で、以下のように過去数年間分の特別指導措置の実態を整理し、また新たに生徒の全体的な意識の傾向を調査することによって、現在の本校の生徒像を探ることにしたのである。

2. 特別生徒指導の実態

本校における特別生徒指導の事例を近々5か年間について整理し、これを検討することによって現代の中学・高校生の行動パターンと、その特徴を明らかにし、今後の生徒指導上の資料としたい。

本稿でいう特別生徒指導とは、問題行動に関った生徒を対象にし、学校の内外を問わず中学生・高校生と

自主性と規律の指導における基本的な課題

して逸脱した非行ないしは不正な行為を問題行動といい、そのための指導は、当該生徒の家庭の特別な協力を得ながら、担任・学年レベルを越えて学校ぐるみで取り組まなければならない個別的・継続的なものである。

まず最初に、特別生徒指導の対象となった件数と、その件数の在籍生徒数全体に占める割合の推移をみると、表1のとおりである。

表1 特別生徒指導件数の推移

種別	年度	年度					平均 (合計)
		54	55	56	57	58	
中 学		1.56%	1.53	2.30	2.68	15.33	4.69
		(4)	(4)	(6)	(7)	(40)	(61)
高 校		2.51%	3.24	2.73	2.73	4.71	3.19
		(10)	(13)	(11)	(11)	(19)	(64)

注：()内は実数

問題行動に関った生徒の件数割合は、中学では1%台から3%台に向けて徐々に上昇し、58年度には15.3%へと一挙に比重が高まった。高校では2~3%台で推移していたものが、やはり58年度になって4.7%へ高まった。58年度において、このように問題行動の多発が中学で著しく40件を数えたが、これを学年別にみると、一年で22件、二年と三年がそれぞれ9件であり、低学年での多発が目立った。一方、同年度の高校でも19件のうち、一年が11件と最も多く、二年は2件、三年で6件であった。

次に、問題行動は単独か、あるいは複数であるかを、性別をも含めてみたものが、表2である。

表2 単・複数別にみた問題行動件数

種別・性別	単・複数		合計
	単独	複数	
中 学 男 子	9(16.1)	47(83.9)	56(100.0)
中 学 女 子	1(9.1)	10(90.9)	11(100.0)
中 学 計	10(14.9)	57(85.1)	67(100.0)
高 校 男 子	36(67.9)	17(32.1)	53(100.0)
高 校 女 子	4(36.4)	7(63.6)	11(100.0)
高 校 計	40(62.5)	24(37.5)	64(100.0)

注：男女を含む複数の場合は両方に加算 ()内は割合

中学の場合、問題行動件数の83.6%が男子であり、その大部分が複数で行動(83.9%)し、問題行動の少ない女子(16.4%)でも、男子と同様に複数で行動(90.9%)していることが特徴である。一方、高校では、男子が問題行動の82.8%を占め、女子よりはるかに高率なことは中学と同様の傾向を示すが、単独行為が67.9%と高い比重を占める点で異っている。半面、女子では複数での行動(63.6%)が目立ち、男女

の差が認められる。

表3 中学生の問題行動

行動	年度					計
	54	55	56	57	58	
窃 盗			1	2	30	33
万 引	2	1	2	1		6
家 出(外泊)	1				3	4
飲酒・喫煙・シンナー				1	2	3
いたずら電話				1	2	3
カンニング		1			2	3
弱い者いじめ			1	1		2
他校生とのトラブル			2			2
定期券改ざん				1		1
無届自転車通学		1				1
女子更衣室のぞき		1				1
不謹慎な態度	1					1
落 書					1	1
計	4	4	6	7	40	61

さて、特別指導の対象となった問題行動の内容は、表3で示すように、中学生の場合、学校内外における窃盗が圧倒的に多い。窃盗の対象物はバイク、自転車の乗物盗、金銭、文房具、衣類などの金品におよび、その行為は2人以上の男子によるグループである。万引の場所は地下街の商店、大型スーパーなどであり、すべてが男子で、単独によるもの4件に対し、グループによるものが2件である。グループ万引は、盗品点数も多く、多額にのぼった。家出・外泊は、家庭内のトラブルに起因するばかりでなく、怠学や学習意欲の低下と相関し、有職少年や他校生との関りを持ち、喫煙やシンナー吸引を伴うことが多く、一回の家出や外

表4 高校生の問題行動

行動	年度					計
	54	55	56	57	58	
無免許運転・交通違反	4		2	2	6	14
窃盗・占有離脱物横領		1		4	4	9
飲酒・喫煙	2	4	1	1	1	9
カンニング	1	1	3		3	8
怠 学	1		2	2		5
家出・外泊		3				3
無断免許取得		1			2	3
暴力行為		2		1		3
無届自転車通学(事故)	1				1	2
下級生への威嚇行為			2			2
ポルノビデオ使用					2	2
不正乗車	1					1
乗用車無断運転(事故)		1				1
授業妨害			1			1
不良交遊				1		1
計	10	13	11	11	19	64

泊で留まることは少ない。

一方、高校生の場合は表4に示すような問題行動である。特徴的なことは、乗物に関係する内容が全体の45.3%におよび、窃盗、占有離脱物横領9件のうち、8件までが自転車とバイクである。無断免許取得は、集計上3件となっているが、実際にはこの数を上まわる。なぜなら交通違反や窃盗で補導された場合に免許証を所持していることが少なくないからである。怠学の実態は、授業をエスケープしたり、学習意欲の低下から成績不振・長期欠席につながり、なかには自主退学した者もいる。暴力行為の対象は下級生や親であり、対教師暴力はみられない。

ところで、以上みてきたような問題行動のパターンは、生徒をとりまく社会環境とそれへの対応関係によって特徴づけられる。生徒の欲求に直結する豊富な物質と情報、いわば外的条件による影響は大きく、生徒の発達段階における好奇心・関心度の心理的作用、倫理観・価値観による意志決定、同世代的な人間関係、一定の年齢に達するまでの生育歴が相互に作用しあって一つの行動が規定される。そうしたさまざまな要因が内在するだけに、効果的指導法は画一的であってはならず、容易ではない。中・高校生にあっては、幼少時における“しつけ”の重要性が強調されるのも、善悪の判断や価値観がその後において無関係でなく、行動面に現われるからである。現代社会の物質文化・情報化の中で、相対的に精神文化が貧困なのは、何も中・高校生に限らないが、適切な選択眼と判断力がにぶり、意志が薄弱化し、理性が全うに機能しにくい状況であることは確かであろう。従って、指導する側の教師は、生徒自身の主体性を欠く誤った判断や、観念的理解と行動が一致せずに良心の呵責の念にかられながらも逸脱した行為に向うことを認識すべきであろう。未成年の時期に生きる生徒一人一人を、人としての正しい道へ誘導し、そのための健全な見方・考え方を示唆するのは、家庭にあっては保護者である親が、学校にあっては教師が、指導上それぞれ応分の責任をもちねばならない。

このような生徒観と指導上の共通認識から、問題行動に関した生徒への特別な個別指導を展開してきた。学校においては集団組織の中での指導であるから、そこには一定の順序性が確立していることはいうまでもない。その順序性は、まず、問題行動の事実認識である。主として担任教師がこれに当たるが、必要に応じて指導部(分掌の長)が関与する。しかし、対生徒への対応はあくまで担任が前面に出ることを基本にしている。事実認識を重視するのは、事後指導上の基礎資料とするために、問題行動の現象面(事実)に終始するのではなく、その動機・心の動きなどの内面に迫り、

中学生・高校生としての自覚とその高揚を促す意図をもつからである。こうした手法で肝要な基本的条件は、生徒と面接する教師との間に信頼関係が確立していることであり、教師に対する一種の畏敬の念が生徒の側にあれば、指導の成果はより大きいといえる。

次に、基礎資料の提示によって指導部が開かれる。ここでは、どのような指導方法と指導措置をとることが当事者生徒にとって適切であるかの検討をし、指導の原案を作成する。この原案を受けて指導委員会が開かれる。そのメンバーは、校長、指導担当運営委員、指導部長、学事部長、生徒部長、当該学年代表、担任である。これは、当該生徒に対して多角的見地からの、より適切な指導を指向するためであり、慎重に検討することを第一にしている。そして、指導委員会における特別生徒指導の原案が教師全員の場に提出され、審議を経て最終決定となる。問題行動が発覚してから指導措置に至るまでの過程は、時間的に可能な限り迅速にして指導効果をあげなければならない。この場合、指導措置を決定するにあたっては、過去の事例を参考にするものの、問題行動が同じであっても、それに関する生徒が異なれば同一に決められるとは限らない。

そこでの決定事項を受けて、当該生徒を中心に、その両親と学校側から校長・指導担当運営委員・指導部長・学年代表・担任が一堂に会し、問題行動をめぐって特別生徒指導の場がもたれる。この場においては、本人の反省はもとより、公理・社会規範と通念・価値基準などに関する説諭となるのは当然であるが、責任のすべては当該生徒にあるとするのではなく、保護者・学校側も謙虚に反省する姿勢がなくてはならない。いわば、保護者(親)のもとにある子への責任と反省であり、教師の生徒理解と指導上の反省であって、そこには人間愛が生きていなければならないからである。高校生の場合には、停学を伴う指導措置となるので家庭訪問を重視するが、いずれにしても既述したように、個別的・継続的な指導と観察が必要である。

3. 学校生活に対する中学、高校生の意識の実態

以下は、名大教育学部附属中学及び高校の生徒に対して行った学校生活に関する意識調査の結果と考察である。これと同様の趣旨で、56年3月に第1回、次いで57年3月に第2回の調査を実施した。それらの調査結果は、校内の研究会議、教官会議、さらに本校主催の研究協議会などにおいて報告され、最近の中学・高校の当面する生活指導のあり方を討議するための参考資料とされた。今回は、過去2回分の成果を踏

自主性と規律の指導における基本的な課題

まえ、それらとの関連・継続として実施した第3回調査にあたる。

(1) 調査の目的

中学生・高校生の学校生活における充実感、反省、意欲、目標、集団生活の自覚、学校に対する不満・要望等の有無、程度、内容をなるべく具体的に調査して、生徒たちの意識傾向の実態を把握することが目的である。調査結果は指導の現状への反省と今後のより有効な指導を考えるための参考資料として生かしたい。

(2) 調査の方法

上記の目的に即した質問10項目をもちこんだアンケート用紙(無記名式)によって、中学・高校各学級において15分乃至20分程度の時間をかけて実施した。その結果は、中学・高校の各学年別、男女別に集計し

	中一		中二		中三	
	男	女	男	女	男	女
非常に充実している	5	6	5	3	10	18
かなり充実している	7	16	8	15	15	13
どちらともいえない	24	16	17	15	8	7
余り充実していない	8	5	4	5	2	2
全く充実していない	3	1	1	3	1	2
計	47	44	35	41	36	42

「非常に」「かなり」を合わせて、中一37%、中二31%、中三72%、高一29%、高二36%。「充実していない」は「余り」「全く」を合わせて、中一18%、中二17%、中三9%、高一33%、高二32%。中・高別にまとめてみると、中学は「充実している」47%、「充実していない」15%、高校は「充実している」「充実していない」が同率の32%である。(56年の調査では、「充実している」は中学58%、高校24%。「充実していない」は中学13%、高校37%であった。)また男女別にみると、中・高の各学年とも、「充実している」は女子が多く、「充実していない」は男

た。また、できるだけ56、57年の調査結果との比較考察をも試みた。

(3) 調査の対象

58年度名大付属中学一・二・三年生全員(各学年2学級)及び付属高校一・二年生全員(各学年3学級、但し高三のみ時機を逸して調査できなかった)。なお、中・高とも男女共学である。

(4) 調査の時期

59年3月(中三のみ3月2日、卒業式の5日前。他の学年は中・高とも3月15日前後)

(5) 調査の結果

A. 自分の学校生活はどの程度充実していると思いますか。

中・高とも各学年別にみると、「充実している」は

	高一		高二	
	男	女	男	女
非常に充実している	4	4	4	2
かなり充実している	12	7	15	23
どちらともいえない	16	31	18	22
余り充実していない	13	14	16	13
全く充実していない	12	1	8	2
計	57	67	61	62

子が多い。なお、正直なところ意外に思われたのは、中三の「充実している」が他に比べて圧倒的に多いことである。この学年は、中二の時以来学習面生活面とも本校においてかつてないほど問題が多く、絶えず注意を受けていただけに、生徒達自身に充実感が乏しく不満が多いだろうと予測されたからである。この結果については、他の質問の結果と合わせて考察していくことにしたい。

B. 本校の学校生活において特にすばらしいと思ったこと、感動したことがありますか。

学年別、男女別にかなり大きい差異がみられる。全

	中一		中二		中三		高一		高二	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
あ	60%	73%	33%	42%	86%	83%	37%	51%	39%	66%
な	40	27	67	58	14	17	63	49	61	34

体としてみると、中学63%、高校50%が「ある」と答えているが、青春時代を生きる者たちとしては、さびしい数字といえよう。なお、Aでふれたように、ここでも中三の「ある」85%は圧倒的である。

<すばらしかったことの内容>

[中一] ○「友人・交友」17名。○「学校祭」15名。○「学校祭以外諸行事」11名。○「クラスの団結」8名。○「休みが多い」8名。○「先輩」7名。○「担

任・先生」4名。○「校風」「部活動」各2名。
 [中二] ○「友人・交友」11名。○「林間学校」6名。○「学校祭」3名。○「球技大会」「先輩」「休みが多い」各1名。
 [中三] ○「学校祭」26名。○「友人・交友」11名。○「クラスの団結」5名。○「修学旅行」「部活動」「自由な校風」各4名。○「男女交際」「自主的活動」各1名。

〔高一〕○「友人・交友」12名。○「クラスの団結、優勝」10名。○「学校行事全体」7名。○「入学できたこと」「学校生活のすべて」各4名。○「部活動」「自主性尊重の校風」各3名。○「成績向上」2名。

〔高二〕○「学校祭」17名。○「研究旅行」12名。○「友人・交友」10名。○「学校祭以外諸行事」6名。○「部活動」5名。○「クラスの団結」4名。○「執行委員の仕事」2名。○「成績向上」1名。

以上の具体的な内容を見ると、「友人・交友」関係

と、「学校祭」などの「学校行事」関係がほとんどを占めている。学校行事を通じて交友関係が深まったり、クラスのまとまりがよくなったりする意味で両者は互いに大きな関連をもっているといえよう。学校教育における諸行事の意義と、自主的な活動によって各行事を盛り上げさせることの重要性について、あらためて考えさせられる。

C. 本校の学校生活において特にいやだと思ったこと、悩んだことがありますか。

	中 一		中 二		中 三		高 一		高 二	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
あ	44%	47%	19%	33%	53%	50%	44%	38%	43%	44%
な	56	53	81	67	47	50	56	62	57	56

全体としてみると、「ある」と答えた者は、中学・高校ともに41%である。Bの「すばらしいと思ったこと」のある者の場合と対比して、この「いやだと思ったこと」のある者の方が、中学で約20%、高校で約10%少ないということは、不十分ではあるが、それなりに明るい要素と考えられる。

〈いやだったことの内容〉

〔中一〕○「友人・交友」「悪口」「あだ名」「うらざり」等17名。○「不良っぽい先輩がいる」「先輩がこわい」等6名。○「担任、先生」「勉強、テスト」「集団リンチ、盗難、いたずら」各3名。○「水泳大会・球技大会」2名。○「新学年にクラスが替わること」「ジュース販売を止めること」各1名。

〔中二〕○「友人・交友」7名。○「先生のひいき」3名。○「通学」「体育の授業」「自分の行動」各1名。

〔中三〕○「友人・異性」7名。○「入試・進学」4名。○「部活動」3名。○「施設の不備」「フォークダンス」各2名。○「通学」「生徒会立候補」「早期学習」「警察補導」「遅刻常習」「スリッパかくし」「水泳大会」「まとまりがない」各1名。

〔高一〕○「友人・異性」8名。○「学校の不活発な空気」「授業・勉強」各5名。○「部活動」「先生」「スポーツ行事」「自分の性格」「小規模校であること」各2名。○「停学処分」「学校祭でのバンド中止」

各1名。

〔高二〕○「授業・勉強・成績」14名、○「友人・交友・異性」11名。○「学校の雰囲気」7名。○「部・クラブ活動」「委員会活動」各4名。○「先生の態度」「自分の性格」「先生との別れ」各2名。○「学校祭」「校則のおしつけ」「進路」「学校生活の意義」各1名。

以上、「いやだと思ったこと」の内容をみてきたが、Bの「すばらしいと思ったこと」の場合と同様に、「友人・交友」関係をあげた者が最も多い。友人（人間）関係が学校生活のすばらしさ、楽しみの要素になるとともに、辛さ、悩みの種ともなることを示している。友情を育てる教育の必要性を感じずにはおられない。

なお、中学において、三年生でさえ、「入試・進学」問題をあげた者の少いことは、一般の中学に比べて、おそらく著しい特徴点といえるのではなからうか。中学・高校併設なればこそそのムードと考えられる。「すばらしいと思ったこと」「いやだと思ったこと」のいずれにおいても、中・高ともに「勉強・成績」関係をあげた者がきわめて少いことは、これも善かれ悪しかれ本校の特徴点といえるであろう。

D. 強く反省させられることがありますか。

「ある」と答えている者が、中・高それぞれ全体と

	中 一		中 二		中 三		高 一		高 二	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
あ	38%	30%	28%	24%	58%	62%	48%	38%	38%	34%
な	62	70	72	76	42	38	52	62	62	66

して40%前後であるのに、中三のみ、60%であるということは、さまざまな問題に揺れた学年として、そ

れなりの自覚が示されているものと思われる。又はむしろ中三以外は自分自身の学校生活を反省する自覚が

自主性と規律の指導における基本的な課題

浅いとみるべきであろうか。

〈反省させられることの内容〉

〔中一〕○「怠けた」「意志が弱かった」「中途半端だった」等7名。○「友人や先輩との関係」等6名。

○「授業態度」「勉強」3名。○「部活動」2名。○「通学バス内のマナー」「無帽」「チームワークを乱した」各1名。

〔中二〕○「たるんでいた」「甘えすぎ」等3名。「友人関係」「自分の行動」「成績」各2名。○「授業態度」「部活動」「高校生を恐がる」各1名。

〔中三〕○「もっと勉強すべきだった」17名。○「はしゃぎすぎ、ふまじめ」8名。○「授業中の態度」6名。○「友人関係」5名。○「消極的、中途半端」4名。○「部活動」「親や先生に迷惑をかけた」

各2名。

〔高一〕○「だらけていた」「放任主義に流された」「自覚に欠けた」等18名。○「自分の性格」4名。○「不勉強」3名。○「遅刻」「問題行動を起こしたこと」各2名。

〔高二〕○「主体性喪失」「だらけ」等15名。○「不勉強」8名。○「しっかりした目標をもたなかった」5名。○「友人関係」「自分の幼稚さ」各2名。

以上をみて、反省の内容を答えた者の少いことがわかる。答え方も簡単なものが多い。

E. 今年を終え、新学年を迎える（中三は中学を卒業して高校生活や社会生活を迎える）に当たり、あらためて希望や意欲を感じますか。

「希望や意欲を感じる」は、中学全体で60%、高校

	中一		中二		中三	
	男	女	男	女	男	女
大いに感じる	9 {(65)}	8 {(54)}	11 {(62)}	11 {(59)}	13 {(64)}	14 {(54)}
かなり感じる	20 {(65)}	16 {(54)}	12 {(62)}	13 {(59)}	10 {(64)}	9 {(54)}
どちらともいえない	10 {(22)}	17 {(39)}	12 {(32)}	12 {(29)}	11 {(30)}	15 {(36)}
余り感じない	4 {(13)}	3 {(7)}	1 {(6)}	2 {(12)}	1 {(6)}	2 {(10)}
全く感じない	2 {(13)}	0 {(7)}	1 {(6)}	3 {(12)}	1 {(6)}	2 {(10)}
計	45	44	37	41	36	42

全体で50%である。その中で、「大いに感じる」は、中学27%、高校17%にすぎない。消極的な傾向といえよう。

〈希望や意欲を感じる理由〉

〔中一〕○「勉強」15名。○「新たな気分でがんばりたい」11名。○「新入生の先輩になれる」4名。○「将来への夢」「新しい友人を得たい」各1名。

〔中二〕○「勉強」「成績向上」等33名。「何事に対しても」4名。○「新しいクラス」「毎日が楽しい」各2名。

〔中三〕○「勉強」10名。○「新しい生活への出発」「高校生活が始まる」等7名。○「いろいろのことを経験したい」7名。○「部活動」5名。○「新しい友人を得たい」3名。○「大学進学を志す」3名。○「就職、人格向上」各1名。

〔高一〕○「勉強」21名。○「新学年の生活」14名。○「新しい友人」1名。

〔高二〕○「進学・受験勉強」50名。○「高校最後

	高一		高二	
	男	女	男	女
大いに感じる	12 {(46)}	3 {(42)}	16 {(52)}	12 {(64)}
かなり感じる	17 {(46)}	26 {(42)}	16 {(52)}	27 {(64)}
どちらともいえない	22 {(36)}	23 {(34)}	14 {(23)}	18 {(29)}
余り感じない	5 {(18)}	12 {(24)}	6 {(25)}	3 {(7)}
全く感じない	6 {(18)}	4 {(24)}	9 {(25)}	1 {(7)}
計	62	69	61	61

の年を充実させる」「だらけた一年を過ごしたので生活改善を計る」「本校に入ったからには本校なりの生活をみつけて誇りにしたい」等10名。○「よい友人」3名。

〈希望や意欲を感じない理由〉

〔中一〕○「新学年のクラス替え」3名。○「テストができない」2名。○「なんとなくやる気が出ない」「学校へ行くといじめられるが、行かないと勉強ができなくなる」各1名。

〔中二〕○「やる気がない」3名。

〔中三〕○「高校に入ってやっていく自信がない」「なんとなく」各1名。

〔高一〕○「つまらない」「充実感がない」等4名。

〔高二〕○「つまらない」「めんどろだ」「努力が効果につながらない」「目標がもてない」等7名。○「自己嫌悪」「劣等感」2名。○「交友関係」2名。○「受験」「学校自体が意欲的でない」各1名。

F. 将来の目標についてどの程度考えていますか。

	中一		中二		中三	
	男	女	男	女	男	女
非常によく考えている	10 {(46)}	3 {(32)}	3 {(27)}	4 {(52)}	9 {(61)}	12 {(62)}
かなり考えている	10 {(46)}	11 {(32)}	7 {(27)}	18 {(52)}	13 {(61)}	14 {(62)}
余り考えていない	20 {(54)}	27 {(68)}	23 {(73)}	15 {(48)}	12 {(59)}	13 {(38)}
全く考えていない	4 {(54)}	2 {(68)}	4 {(73)}	5 {(48)}	2 {(59)}	3 {(38)}
計	44	43	37	42	36	42

	高一		高二	
	男	女	男	女
非常によく考えている	13 {(55)}	9 {(47)}	10 {(54)}	9 {(71)}
かなり考えている	20 {(55)}	23 {(47)}	23 {(54)}	35 {(71)}
余り考えていない	13 {(45)}	26 {(53)}	21 {(46)}	15 {(29)}
全く考えていない	14 {(45)}	10 {(53)}	7 {(46)}	3 {(29)}
計	60	68	61	62

〈目標の内容〉

〔中一〕○「教師」3名。○「医者」2名。○「保母」
「ピアノ教師」「船長」「デザイナー」「雑誌編集者」
「サッカー選手」「野球選手」「プロレスラー」「車の
整備士」「まず名大付高へ」「県芸大(美)志望」「海
外へ行きたい」各1名。

〔中二〕○「I. B. Mに入りたい」「音楽関係」各1名。

〔中三〕○「保母」「幼稚園の先生」5名。○「エン
ジニア」3名。○「医者」「税理士」「車の整備士」
「政治家」「デザイナー」「栄養士」「アナウンサー」
「建築家」「航空関係」「貿易関係」「保健関係」「音
楽・芸術関係」「公務員」「マンガ家又は画家となって
世界中絵の旅をする」「高校生になったらタイプと英
語を習い大学はアメリカへ行き、将来は父の貿易業を
手伝いたい」「家のあとつぎ」「人のやらぬこと」「明
るい家庭をつくりたい、また、ごく普通の会社に勤め
たい」各1名。

〔高一〕○「プロゴルファー」「建築家」「鉄道員」
「スチュワデス」「結婚」各1名。

〔高二〕○「大学進学(早大、慶大、名城大等)」6
名。○「音楽家」「大学で地質学を専攻し、その後そ
れを生かす道に進みたい」「何か資格をとり、23歳ま

でに結婚したい」「短大を出て適当に就職し、結婚す
る」各1名。

中学生も高校生も、約半数の者が将来の目標につ
いて考えてはいるが、その内容を具体的に記入した者は
以上のごく少数である。高校生について特にそれ
が言える。概して、夢が感じられない。「将来あれ
になりたい、こうしたいって思うことはたくさんある
けれど、最後には“どうせ試験が難しいから”とあき
らめてしまう(中一女)、「昔はいろいろよく考えた
が、最近はどうも考えないことにしている(中一男)、
「ごく普通の会社に勤めたい(中三男)、「短大を出
て適当に就職し、結婚する(高二女)」という類の答
えは、以前に行った調査では見られなかったものであ
る。生徒一人一人の個性、能力を伸ばし生かす教育は、
生徒それぞれに青少年にふさわしい目標を考えさせ、
それに向けてひたむきに努力させる指導でなくてはな
らぬと思う。その意味で、「目標について考えてい
る」者、中学47%、高校57%、「考えていない」者、
中学53%、高校43%というのは残念な数字である。

G. 本校の集団生活の規律はどの程度守られていると
思いますか。

規律が守られているか、いないかの判断は、学年に

	中 一		中 二		中 三	
	男	女	男	女	男	女
いきいきとよく守ら れている	1 (2)	9 (20)	10 (26)	10 (25)	2 (6)	1 (3)
管理によって守らさ れている	10 (22)	6 (14)	6 (16)	6 (15)	3 (8)	3 (8)
余り守られていない	10 (22)	7 (16)	14 (37)	11 (27)	11 (31)	12 (31)
ほとんど守られてい ない	8 (18)	2 (5)	4 (11)	3 (8)	3 (8)	1 (3)
わからない	16 (36)	20 (45)	4 (11)	10 (25)	17 (47)	22 (56)
計	45	44	38	40	36	39

	高 一		高 二	
	男	女	男	女
いきいきとよく守られ ている	1 (2)	4 (6)	4 (7)	3 (5)
管理によって守らされ ている	5 (8)	4 (6)	13 (21)	9 (14)
余り守られていない	22 (35)	14 (23)	13 (21)	16 (26)
ほとんど守られてい ない	15 (24)	13 (21)	17 (28)	7 (11)
わからない	19 (31)	27 (44)	14 (23)	27 (44)
計	62	62	61	62

より、また男女により、かなりの差がある。全体とし
てみると「守られている」「守らされている」を合
わせて、中学28%、高校17%。「守られていない」は
「余り」「ほとんど」を合わせて、中学35%、高校
47%となる。

〈生活態度においてよいと思う点〉

〔中一〕○「明るい」「自由」「のびのびしている」等
11名。○「友人関係」「先輩後輩関係」「先生と生徒
の関係」6名。○「団結力がある」「まとまりがよい」
3名。○「不良が余りいない」1名。

〔中二〕○「明るい」「のびのびしている」等6名。
○「極端な不良がない」1名。

〔中三〕○「のびのびしている」9名。○「団結、ま
とまり」8名。○「友人や先輩の関係」4名。

〔高一〕○「自由」「自主性」8名。○「まとまり」7
名。○「先生の理解」1名。

〔高二〕○「自由」「自主性」12名。○「友人関係」
「協調性」「平和」等5名。

〈生活態度においてよくないと思う点〉

〔中一〕○「規則が守られていない」「けじめがない」
「自由すぎる」「帽子をかぶらない」「そうじをしっか
りやらない」等28名。○「式、朝礼、集会での態度
がわるい」3名。○「先輩後輩関係」1名。

〔中二〕○「規則が守られていない」6名。○「先輩
後輩関係」3名。○「生徒の態度」2名。○「先生の
態度」2名。○「自分さえよければという考え方」
「生徒会活動の時うるさい」「自由すぎる」各1名。

〔中三〕○「授業態度が悪い」9名。○「自由すぎ
る」「服装、帽子の乱れ」「遅刻」等9名。○「ふざ
け」「いたづら」「落書」等7名。

〔高一〕○「授業態度が悪い」「生活のだらけ」等14
名。○「自主性に欠ける」「無責任」「グループを作っ

自主性と規律の指導における基本的な課題

て行動する」等7名。○「中学生の態度がひどい」4名。○「高一全体の空気が悪い」「付中からの子がいばる」各1名。

〔高二〕○「自由に甘えてだらけている」「シャキッとした何か欠けている」「自主性がない」「自由の本来の意味を誤解している人がいる」等26名。○「中学生の態度が悪い（服装、無帽、遅刻等）」11名。○「教師の生徒をよくしようという意欲が少い」「学校の放任主義」「進学指導が弱い」「生徒への差別」等11名。○「まとまりに欠ける」「協力性がない」等8名。

	中一		中二		中三	
	男	女	男	女	男	女
非常にきびしい	3 {(18)}	1 {(5)}	2 {(8)}	1 {(16)}	1 {(9)}	1 {(9)}
かなりきびしい	5	1	1	5	2	3
どちらともいえない	23 (51)	30 (68)	16 (43)	16 (42)	16 (44)	20 (48)
余りきびしくない	11 {(31)}	12 {(27)}	14 {(49)}	14 {(42)}	9 {(47)}	15 {(43)}
全くきびしくない	3	0	4	2	8	3
計	45	44	37	38	36	42

一11%，中二12%，中三9%，高一3%，高二7%。「きびしくない」は「余り」「全く」を合わせて、中一29%，中二45%，中三45%，高一47%，高二53%である。56年，57年に実施した同様のアンケートの結果と比較すると、中学は、「きびしい」が、56年15%，57年19%，59年11%。「きびしくない」が、56年35%，57年29%，59年40%。高校は「きびしい」が、56年10%，57年3%，59年5%。「きびしくない」が、56年57%，57年67%，59年50%と、それぞれ推移している。中・高とも、いずれにしろ、「きびしい」と感じる者が少く、「きびしくない」と感じる者が多い点では変わらない。

〈きびしいと思う点〉

〔中一〕○「自転車禁止」「どうしてもよいことにうるさい」「殴る教師がいる」「他校生は無帽生徒が多いのに本校はきびしく注意するので、身なりのだらしない子は少い」等5名。

〔中二〕○「小さなことを大きさに注意する」2名。

〔高一〕○「オートバイ禁止」「アルバイト規制」2名。

〔高二〕○「遅刻に対してきびしい」「束縛という点ではきびしくないが、本人にまかせるからきびしい」等3名。

〈きびしくないと思う点〉

〔中一〕○「規則が大まか」「いろいろとうるさく注意しない」「朝礼，STなどさわがしい」「先生によって態度がちがう」「自分で考えて行動しなさいと言われることが多い」等18名。

〔中二〕○「服装にけじめがない」5名。○「先生が

以上の中で最も多数の生徒が指摘している点は、規律の守られていないこと、けじめのなさや自主性の欠如についてである。「一人一人はいい人かもしれないけど大勢集まるとアホみたい」（高二女）、「自由なのはよいが、全く自分でやろうとする自主性、主体性がないように思われる。いろいろな性格の人がいるけれど、一人では何もできない人もいるように思う」（高二女）等は問題点を端的に衝いているといえよう。

H. 本校の生活指導は厳しいと思いますか。

「きびしい」は「非常に」「かなり」を合わせて、中

	高一		高二	
	男	女	男	女
非常にきびしい	1 {(3)}	0 {(3)}	6 {(12)}	0 {(2)}
かなりきびしい	1	2	1	1
どちらともいえない	34 (58)	26 (43)	28 (46)	21 (34)
余りきびしくない	12 {(39)}	26 {(54)}	10 {(42)}	32 {(65)}
全くきびしくない	11	7	15	8
計	59	61	60	62

甘すぎる」2名。○「休みが多い」1名。

〔中三〕○「規則があいまい」「髪についてとやかく言わない」「服装検査がない」「けじめがない」等8名。○「先生と生徒、先輩と後輩の関係」1名。

〔高一〕○「服装の乱れ」「持物」「登下校の態度の悪さ」「授業中のだらけ」等5名。

〔高二〕○「校則がなまぬるい」「指導があいまい」「校則に違反してもうるさく注意されない」「服装、態度の乱れ、ことばづかい等すべていいかげん」「服装、髪形について校則の基準で悩まなくてすむ。規則がきびしいほど非合理になるので現状がよい」等11名。

以上、生徒の感じる「指導のきびしい点」「きびしくない点」を具体的に列挙したが、「規則が大まかだ」「うるさく注意しない」から本校の指導はきびしくないという感じ方を示す答えが大半である。先述のJの「生活態度においてよいと思う点」「よくないと思う点」の答え方と深く関連し合っている。要するに多数の生徒が、生徒の生活態度は「だらけている」「けじめがない」、したがって学校として、もっと「きびしく」ひきしめ、とりしまるべきだという感じ方をしているとみられる。

ここで大事なことは、いわゆる「きびしさ」の意味を生徒たちがどう解釈しているかという問題である。「自主性尊重」の教育における本質的な意味での「きびしさ」が正しく生徒たちに理解されていないのである。「規律の指導」「きびしい指導」が、服装、態度等の主として外形面に対する管理として受けとめられ、きびしさの主体が自分自身であるということを目覚

きていないと思われる。

「先生が、自分で考えて行動しなさい、という」(中一男)と答えた者がいたが、先生の真意を正しく理解できない生徒が多いのではないだろうか。「束縛という面からみるときびしくないが、本人にまかせるからきびしい」(高二男)と答えた者もいるが、このように、きびしさを主体的、内面的に受けとめた答え方の例はきわめて少数であった。

56年、57年の調査結果と対比して生徒の答えた「きびしい」「きびしくない」の具体的事例をみると、

	高一		高二	
	男	女	男	女
非常に強く感じる	0 { (43)}	4 { (41)}	6 { (50)}	2 { (32)}
かなり感じる	20 { (33)}	14 { (50)}	12 { (36)}	11 { (39)}
どちらともいえない	15 { (33)}	22 { (50)}	13 { (36)}	16 { (39)}
余り感じない	1 { (24)}	4 { (9)}	3 { (14)}	7 { (29)}
全く感じない	10 { (24)}	0 { (9)}	2 { (14)}	5 { (29)}
計	46	44	36	41

(中三では、この項がアンケートから抜けていて調査できなかった。)

「愛着、誇りを感じる」は、男女合わせると、中一42%、中二40%、高一23%、高二23%。「感じない」は、中一17%、中二22%、高一36%、高二39%である。

中学では、愛着、誇りを「感じる」者が「感じない」者より多数であるが、高校では逆転して「感じない」者の方がかなり多数となる。なお、どの学年も、「非常に強く感じる」者は数%の少さであるのに対して、「全く感じない」者は10%から20%以上となり、特に高二男子は30%以上に及ぶ。

ちなみに、56年の調査では、「誇りを感じる」が中三18%、高三29%、「感じない」が中三26%、高三31%であった。特に大きく変わったとは言えない。

母校への愛着や誇りは、学校生活の充実感、意欲、目標の意識、自覚が高まるなかで生まれるものであり、日常生活の充実感の裏付けが必要である。

J. 学校への不満や要望があったら自由に書いてください。

この質問に応じて何らかの答を記入した人数は、学年別によると次のようである。

中一25名、中二12名、中三28名、高一24名、高二35名。中学・高校とも調査対象生徒数の25%前後に過ぎない。これは、学校への不満や要望がないからではなく、むしろ、学校生活に対する意欲、熱意の乏しさ、不信、あきらめ等の表れとみるべきであろう。

<不満・要望の内容>

[中一] ○「先生の態度・人格」「先生の中で生徒を

最近の指導の改善に応じて変化が表れている。例えば、前回では「靴、靴下の色・形についてきびしい」や「欠席、遅刻、早退に対してきびしくない」の指摘が最も目立っていたが、58年度以降の校則改正を伴う新たな指導によって実態がかなり改善されてきたこともあり、今回は、そのいずれについても余り記されていない。また、教師側の見解や態度の不統一、不徹底への鋭い批判が前回は高一・二だけでも100名以上もあったが、今回はほとんど目立たない。

I. 本校に対する愛着、誇りを感じますか。

	高一		高二	
	男	女	男	女
非常に強く感じる	2 { (17)}	1 { (30)}	3 { (22)}	0 { (24)}
かなり感じる	8 { (37)}	19 { (43)}	10 { (30)}	15 { (45)}
どちらともいえない	22 { (37)}	29 { (43)}	18 { (30)}	28 { (45)}
余り感じない	15 { (46)}	14 { (27)}	9 { (48)}	11 { (31)}
全く感じない	12 { (46)}	4 { (27)}	20 { (48)}	8 { (31)}
計	59	67	60	62

ひいきしたり、いやらしいことを言ったり、バカにしたりする人がいる。生徒が努力したら、それぞれの努力に応じて評価してほしい」「朝礼時、先生の注意が多く、だらだら言うからもっと要点を簡潔に言って早くすませてほしい」「あいさつしても返事をしない先生がいる。とても頭にくるからそういう態度は止めてほしい」等6名。○「制帽を無しにしてほしい」4名。○「牛乳の種類を増やしてほしい」2名。○「生徒をもっとしかってほしい」2名。○「そうじ、美化をしっかりとやらせてほしい」2名。○「中・高の行事を合同にしてほしい」2名。○「クラブの増設」「給食」「女子制服の改正」「部費増額」各1名。

[中二] ○「先生がしっかりしてほしい」2名。○「自転車の許可」2名。○「制帽を止めてほしい」2名。○「三ヶ月に一度くらい映画会を開いてほしい」2名。○「生徒数を増やしてほしい」「部活動の活発化」「くつを自由にさせてほしい」各1名。

[中三] ○「進路や入試の指導」「高校受験の実態についてくわしく教えてほしい」「本校と公立校とを受けられるようにしてほしい」「将来についてやっぱり不安です。先生たちの人生談話をききたい」等6名。○「施設の改善」「外装をもっと明るくしてほしい」「暖房や窓の修理」「新しい図書を入れてほしい」等6名。○「先生の態度が不満」「一定の子を始めから悪いと決めつける先生がいる。そういうのはすごくいやだ」「もっと生徒といっしょに話し合える先生がいてほしい」等5名。○「指導をきびしくしてほしい」「服装検査をする方がよい」「授業中静かにさせてほしい」等4名。○「制帽は強制しないようにして

ほしい」2名。○「もっと自由な学校にしてほしい」2名。○「生徒活動の時間を高校にも設けてほしい」2名。○「女子夏服改正」「全教科の補習」「クラブ増設」各1名。

〔高一〕○「きれいな教師がいる」「生徒を平等に扱ってほしい」「先生方が怠けている」等5名。○「中学を分離した方がいい」2名。○「夏の女子制服を変えてほしい」2名。○「部室がほしい」2名。○「指導をもっときびくしてほしい」2名。○「オートバイの許可」「下校時刻をもっと遅らせてほしい」「パンの種類をもっと増やしてほしい」「ジュースの復活」「STを8時35分に戻して」各1名。

〔高二〕○「校門がない」「校舎が古い、ひびだらけだ」「教室がくさい」「クーラーを入れてほしい」「設備をよくしてほしい」等10名。○「受験指導をもっとしっかりやってほしい」6名。○「先生が気に入らん」「先生はもっと生徒を信用してほしい。信用されれば悪いことなどしなくなるのではないかと思います」「先生と生徒の関係を直してほしい」「できる奴とできない奴を生活面で差別するな」「行事企画、規則などで先生同士のくいちがいがあるし、生徒とのくいちがいもやたらと多い。先生・生徒間の連絡が不十分、それが不満の元凶です。改善を求めたい」等6名。○「中学生のひどい子をどうにかしてほしい」3名。○「ジュース販売機撤去は納得がいかない。コップを散らしていない者にとっては不満だ」等2名。○「国立としての、公立にはない特色を作してほしい。新設高校がどうのこうのといつて今までの名大付高を変えないでほしい」「付属という学校をもう一度考え直して独自の方向を作って下さい。本校ならできるはずです」2名。○「文化祭や歓迎会などでバンド演奏をやらせてほしい」2名。○「生徒会のシステムがよくわからないから予算のこと一つにも口を出せない」1名。

以上、生徒の不満や要望をなるべくそのままのことで記録するように心がけたが、率直に言って物足りない感じである。56年、57年の調査に際しては、もっとはるかに多数の生徒が真剣に学校への不満や要望を書いていた。彼らの心底からほとぼり出たような文章の勢いに圧倒された記憶が今でも残っている。学校の教育方針や教師の姿勢に対して問題の本質を抉り出すように追求し、強烈に訴えてくるような批判には今回はほとんど出会わなかった。現在は当時よりも学校の指導体制が徐々に改善された結果かもしれない、やや安心に似た気分にもなるが、やはり生徒の気迫が見られないことは非常に残念である。しかしながら、上記の具体的な不満、要望については生徒たちの実態、真意を正しく汲みとり、適切に対応していかなければならぬことはいままでもない。

10項目にわたるアンケートの結果は以上に記した通りである。本校中学・高校生の意識の実態を知り得たなどとはもとより言えないが、全体としての傾向を把握するという調査目的はかなり果たすことができたと思う。この資料を生かして、これまでの指導への反省と検討を加えながら今後の新たな実践の道を着実に探っていきたい。

なお、文中でもふれたように、各学年中、特に中三に対して深い関心を寄せながらアンケート結果を見守ったのであるが、何事につけ問題の多い学年であったにもかかわらず、「学校生活が充実していた」、「すばらしいと思ったことがある」、また「強く反省させられることがある」等の答えが、他学年に比べて圧倒的に多かった。同学年中の、いわゆる問題児に関する非難等を表した答えは一つも無かった。これらは、この調査によって知れた興味深いことと言える。全員の卒業、進路の見通しがついた時点にあたっていたこともあるが、他学年との差異の原因については今後の研究課題としたい。

4. 生徒像の問題点と基本的な課題

以上に述べた調査結果にしたがって、本校の平均的な生徒像らしいものを簡単にまとめてみたい。

中学生像——学校生活にある程度充実感を覚え、すばらしいと思えることも体験している。いやだと思ふこと、悩むようなことは余りない。充実感の理由としては、第一に友人関係、第二に学校祭等の行事関係である。また、悩むときの理由も友人関係が第一である。勉強、成績、進路、受験のことはそれほど苦にしていない。日頃たるんでいたこと、不勉強だったことなどについて反省はするが、深く自分を見つめるところまではいかない。勉強、部活動などへの意欲はあるが、積極的とはいえない。将来の目標については漠然と考えている程度である。自分たちの生活態度をみるときは、だらけていると感じる。その原因は学校の指導が厳しくないからだと思う。自由や自主性の意義、集団生活における自己の責任など余り理解できていない。母校への愛着・誇りはかなり抱いている。学校・教師に対する不満、要望もあるが、はっきり主張するほどではない。

高校生像——学校生活における充実感は少ない。充実感の主たる理由は、中学生の場合と同様、友人関係と諸行事であり、勉強・成績による充実感は大きくない。勉強・成績・友人関係等について悩むこともあるが、それほど深刻に考えてはいない。不勉強、生活のだらけなどについて反省はするが、痛切さはない。自己反省や自覚的な姿勢に欠ける。学校生活に対する意欲は消極的であり、将来の目標も真剣には考えていない。

進路問題、受験勉強の不安はあるが、目標が定まらず、やる気が出ない。本校生徒の生活態度を好ましいとは感じていない。自主的活動は不活発で、集団の規律はしっかり守っているとは思わない。学校の指導には厳しさがなく、そのために生徒の態度はけじめがないのだと感じている。自分自身への反省は浅く、傍観的な見方をしがちである。母校に対して愛着や誇りを余り感じていない。学校や教師への不満や要望は、進路、受験のを中心にしていろいろあるが、強く反発したり、積極的に要求したりするほどではない。

中学・高校それぞれの平均的な生徒像をざっと描いてみたところ、以上のように頼りない生徒像になってしまった。本校の教育が目ざす生徒像、即ち自主性尊重の教育方針に基づいて育てられるべき生徒像とは大きな懸隔のあることを認めざるを得ない。現状の生徒像をいかにして、自主性に富む積極的な生徒像に近づけていくのか、それが今後の課題となる。

基本的な課題の第一は、生徒一人一人の学校生活に対する自覚を高め、責任感を育てることである。生徒を個別的にみるとそれぞれ性格もよく能力もありながら、集団としては、付和雷同的になったり、烏合の衆になったりしやすい。非行問題の事例をみると、単独よりも複数の場合が多く、個々の価値判断力や自制心が働かず、仲間意識にひきずられて失敗する例が目立つ。一人一人が自己を見つめ、正しく価値判断できる能力、態度を養うことこそ自主性尊重の教育の基本といつてよいであろう。

「自由なのはよいが、全く自分でやろうとする自主性、主体性が無いように思われる。いろいろな性格の人がいるけれど、一人では何もできない人もいるように思う」(高二女)、「自主性ということばを理解せず、大分だらけているような面がある。もっと本人が自覚しなければ、“自主性”は“怠け”になる。そこがうちの学校の“ぬるま湯”の根源ではないか」(高一男)と、生徒がアンケートに答えて問題点を指摘している通りである。56年の調査で、自主性尊重の教育方針や自由な校風についてどう思うかとの問いに対して、高校生で特に多かった答は、本校の自由には厳しさが無く、放任主義に過ぎない、というものと、真の自由の意味がわからないというものであった。その点、現在まで十分に指導してきたとはいえない。今後、自由や自主性の本質的な意味と、それに伴う責任や義務の重さなどについて、説得力をもって理解させる必要がある。中学生に対して、その点が特に重要である。

第二は、生徒一人一人の個性に応じて、将来の目標を含め、日常の努力目標を持たせることである。教科学習、教科外活動を問わず、何らかの目標に向かって意欲を燃え立たせ、関心・精力を集中させたい。学級

や教科の担任、生徒会関係、部、クラブ等の顧問が、折にふれて生徒の長所を見出し、激励することが生徒に生きがいを与えることになりうると思う。なお、生徒各自に目標を持たせる指導は、進路指導と深く関連する。進路指導は生徒の意欲を喚起する指導でなくてはならない。

第三は、学級、生徒会、部、クラブ等の日常的活動や諸行事の活動に全員を積極的に参加させることである。目標に向かって団結した集団活動を通して、交友関係が深められ、連帯感も強められる。それが、学校生活における充実感や感動の源泉となることは、上記アンケートの結果にも表れていた。また、母校への愛着、誇りは、充実感のある学校生活を重ねるうちに自ずと生まれてくるべきものである。

学級、生徒会、部、また学校行事等において生徒を生き生きと活動させるためには、生徒の自主性の背後に当然、教師のきめの細かい配慮と熱意ある指導が必要である。「自主性尊重」が名目に過ぎないと感じられるとき、生徒の心に、学校に対する懐疑、不信感が芽生え、それが無気力や荒廃の原因となることは、56年、57年の調査結果に鋭く表れていた。集団活動に精一杯参加する中で、生徒は自主性と規律との関係や、その厳しい本質的な意味を体得できるのである。

5. あとがき

本稿は、原・米山二人の共同研究としてまとめたものであるが、特別生徒指導の資料に関して、指導部長、倉田有邦氏の御協力をいただいた。なお、時間的余裕がなかったため、内容についての討議や資料の検討など十分にできなかった。当初は、教師対象のアンケートをも実施し、生活指導の理念と現実との問題点を様々な角度から探りたいと考えた。また、年間を通じての教員会議、研究会議、担任会などでとり上げられ、話し合われた生活指導の具体的な諸問題を整理したいとも考えた。いずれも実現できなかったが、生活指導に教師全員が協力してとりくむための基礎的な仕事として、次の機会には是非実現したい。

生活指導関係の問題は、事後処理に追われる形で論議されることが多い。こうした現状から一歩踏み出して、事件を未然に防ぎうるような見通しのある対策を日常的に講ずる形に転じたいものである。私達の今回の成果は未熟であるが、これをできる限り実践の場に生かしながら根気よく検討を重ねていきたいと考える。

[注] (1) 米山 誠「生徒指導における自由・自主性・規律等の問題」(『名大教育学部附属学校紀要 第26集, 1981』)、同「生徒指導における自由・自主性・規律等の問題Ⅱ」(『同紀要 第27集, 1982』)

(2) 同 上